

消えそうな漁師の神様

エビスと船霊ふなだま

向浜の漁労民俗調査より

入江 秀利

何年前の新春だったか、海岸は「かんちゃん」騒動で持ちきりでした。別府湾に子供のザトウクジラが一頭迷い込んで、潮を吹いたり尾を見せたり、時にはジャンプまで見せてくれるので、ホエールウオッチングの人々が田ノ浦の海岸に押しかけました。

しかし、沿岸の漁師は漁期のイカが食い荒らされると渋い顔をしていました。

鯨やイルカのようにイワシや鰯ぶりなどの回遊魚かいゆうぎょを追っかけて来るものは、大漁を授けてくれるエビス神でした。エビス※信仰は豊漁をもたらす神として漁民の間から起こった信仰です。

エビスさまは、大鯛を抱えた釣人姿の恵比須えびす天てんになる以前は、クジラ、サメやイルカであり、ときには流ながれ佛ほとけ（水死人）であり、海中から取り上げられた石である場合もあったのです。「えべっさん」は漁師の大切な神様でした。

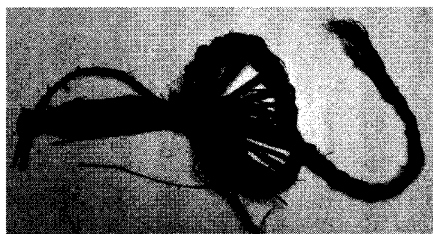
漁師の神様にはもう一つ船霊ふなだまがあります。

正月二日の早朝、漁船（伝馬船てんません）で船霊様にお祀まつりする米沢のお爺さんを毎年見かけました。船霊様は船梁ふなはりに祀り込められています。ノリゾメの二日に、紋付き羽織を着た米沢さんが、松飾りをした漁船の船霊様に藁わらを編んだ器うつわに鏡餅・雑ぞう煮にや手製の正月料理おせちをお供ともえしてお詣まいりしていました。

船霊様は沖で漁師に気象の異変を知らせてくれる海上安全をもたらす精霊です。

海の人は山の民や農民にくらべると、禁忌きんぎや俗信よこなだに頼りやすいように思われます。それは海の生活というものが、とかく偶然（運）によることが多いからでしょう。一定の場所で見つけて生産する農業と違い、漁業の生産は遭遇する魚群の多少に左右され、「板子一枚下は地獄」といわれるように命さえ偶然に左右される厳しい生活だから、何かに頼ろうとする気持ちが強くなるのは当然でしょう。

瀬戸内海は漁民の俗信の「博物館」といわれます。横灘よこなだと



いわれた郷土は瀬戸内海の西の端にあたります。

若いときに向浜むかいはまの漁師さんに聞いた、今はもう昔のことになつたお話を紹介したいと思ひます。

※ エビスは恵比須、恵比寿と漢字をあてる。此の文では恵比須に統一する。

一 エビスさまのこと

神話では伊弉諾尊いざなのみことと伊弉冉尊いざなみのみことの第三子の蛭子尊むしらのみことが「えびす」になつたといわれています。蛭子尊は生まれつき足が立たなかつたらしく、両神は三歳のときに天磐橿船あまのいわすねふねという葦あしの舟に乗せて海に流しました。葦舟は摂津国西宮にしのみやの浦に漂着し、そこで祀られて恵比須（エビス）神になつたとされています。

民間信仰では異郷から訪れる「まれびと」（まれびと）を幸福ほうふじょうや豊穰ほうじょうをもたらす神（神霊）としてを崇める習わしがありました。

西宮の恵比須（蛭子）が葦の舟で浦に流れついたという神話も、蛭子尊が異境からの漂着神であることを物語るものでしょう。エビス信仰は豊漁を祈願する海村の漁民たちの間におこつた俗信で、クジラ・イルカ、ときには流佛も来訪神、漂着神のエビスとして祀まつられました。

エビスは恵比須・夷・戎・蛭子と書きます。「夷」の字の

大は両手両足をひろげた人を意味し、足をひろげて踏ん張り、手を大きく広げて弓を引き絞つた人間を表しているそうです。古代中国東方の弓を引く異境の人をさした字で、「戎」も十（亀の甲の鎧よろい）を付けて戈を持った中国西方の異民族をさしているそうです。夷や戎の字は、日本で来訪神、漂着神のエビスという言葉にあてた漢字です。

こんな漂着神に大漁を祈願する漁民の信仰が、やがて室町時代の頃から農業の豊穰や商売繁盛をもたらす福の神として、大黒天とともに恵比須天が農民や商人にも祀られるようになりしました。エビス信仰が漁民の間からおこつたことは、七福神の恵比須天が釣竿をかついで大鯛を小脇に抱えた神像で分かります。

子供の頃、多分お正月だつたでしょうか、家の玄関に「舞い込んだ、舞い込んだ、おえべっさんが舞い込んだ！」といつて、烏帽子えぼしに水干姿で御幣ごひと釣竿を持つ恵比寿様の傀儡くわいを廻しながら、「戎舞えびすまわし」が訪れました。母がチリ紙に五錢玉を包んであげていたことを覚えています。西国の「戎舞わし」は西宮の恵比須神社の下級神人や戎えびすか（傀儡子）がエビス神の御札お札と人形を持って家々を訪れていたのです。幼い私は季節が巡つて異郷から来訪する不思議な神様を待っていました。

内山の市恵比須



扇山と内山の谷間 祓川の畔に、最近まで大漁旗が供えられていた市恵比須の石祠があります。ご神体は一辺ばかりの自然石で生産呪術の「リングア(男根)」に似ているように思います。

弘化二年(一八四五)に書かれた『鶴見七湯廻記』に市恵比須に

ついで、次のような文があります。

「照湯の温泉より河上三町ほどのぼりて祓川と云う處あり。大平山北のふもとにして川より北のかたには平らかなる野つら廣きこと也。

いにしへ鶴見社に位田の神領ありて、大社のとき此所にして年々夏越の御祓有りしより祓川の名有りとかや。其の頃は三日の市有りて遠近よりも商客あまた集り賑ひけるよし。此川邊に其の市をなせし時の市え比須の石躰有りて、今も春秋二季の祭は小倉村里正佐藤信承か家より怠なく執行する事也。

且つ此の市蛭子に祈るときはよく海漁有りとて、此の速

見浦々にて綱引の獲もの少きときは立願をなすに、必その験有りけると也。其の時は獲ものうちにて大なる魚を

一尾是に神酒を取添て長たる漁者この市蛭子にもうでて石躰の前にそれを供へ、大宮司家に頼み祓を奉る也。夫より

大宮司もともに小くら(小倉)にくだりて、佐藤か家に件の酒と魚

とを出しぬれ

ば、則ある

じ(主人)し

て是を開き

侍ること先

例のよし也。

(後略)」

ここではエビ

ス信仰は漁業の

みではなく、交

易(市)の神に

もなっています。



祓川の市恵比寿原 (鶴見七湯廻記)

昔から向浜の漁師は、不漁が続くとワケエモン（若い者）が魚一尾と御神酒を下げて市恵比須に詣で、鶴見社の宮司を呼んでお祓いをしてもらいました。お陰で漁があると必ずお礼参りをしたそうです。

十月から翌年三月まで、鯛のヒブリ（ヨタキ）漁がありました。ヒブリ（火振力）とは月明かりを避け、漁場でコエ松を焚いて鯛の群を寄せて二艘の網船で網を入れる鯛漁のことです。新月の夜をはさんだ前後の数日をヒトセブリといい、ヒトヒブリ毎にワケエモンが数人で市恵比須まで祈願に登ったそうです。

また、一月十日の「十日戎」の日に、網方（網元）が網子を家に招いてエビス様を祀り直をして乗り組みの契約をしました。また、十月の初ヒブリの日をヒブリ漁の「口アケ」といつて網下しをします。この日も網方は網子を招いてエビス様を祀って直をしました。

定置網の最も中心に烏帽子子のような突起のあるアバ（浮子）があります。これをエビスアバ、または網霊（おしなま）といひ、網とアバを海に入れるときには必ず「エベッサン」と唱えたそうです。

不思議なことに、松原の住吉神社境内に勧請した市恵比須

の石殿にいくら豊漁を祈願しても一向に効き目がなく、内山の市恵比須まで詣でて祈ると漁があるというので、古者は「エベッサンは内山の方がお好きで、すぐ舞い戻ってしまう」といつていました。

※ 鶴見七湯廻記 弘化二年に書かれた鶴見村の風土記

※ 鶴見社 鶴見の火男火売神社

※ 直 神と食事を共にすること。

ムラギミの恵比須様

ムラギミ（村君）とは網漁を仕切る古参の漁師、または家柄で『和名抄』にも見られます。瀬戸内の漁村には現在でも残っています。向浜では故友永直氏の屋号に残っていました。

ムラギミの友永家には多くの漁労関係の文書が保存されてきました。大漁を祈る木彫りの立派な恵比須天（高さ約三十センチ）も伝わっていました。不漁が続くと網方がこの恵比須様を借りに来て、マン直しの直をしたそうです。他所の漁村には、「エビス盗み」といつて、豊漁をもたらすエビスを盗む悪習もあつたそうです。

それぞれの網方はムラギミのエベッサンのご利益にあずかっているのので、網漁ごとに利得の何分かのお供え物をした

そうです。

友永家では、天明年間に始まった百八十年間の恵比須講の書類がきちんと保存されていました。旧浜脇の秋葉神社の境内にエビスさまと呼ばれる石体や石祠が残っていました。浜脇のエビス祭りの儀式やお供えもの、作法などが書かれた文政十年（一八二七）の「えびす様祭礼格式帳」が残っていました（『別府今昔』）残念ながら、友永直氏が亡くなってから漁労関係の文書とともに全て失われてしまいました。

私の祖父が朝早く向浜の舟溜りまで散歩に行つて、時々魚を下げて帰りました。帰港した網船の漁師から貰つて帰るのです。鯛の網船が港に帰ると子供たち達がタブ（網）を持って集まりました。サイモライ（賽）といいました。網に入つた鯛以外の魚をコイヨとかヨリモンといつて、この魚を網船の親方がエベッサンの化身である子供にお供えするのです。祖父はそのおこぼれを貰つたのです。

流佛との問答

向浜では流れ佛のことをシビと呼んでいました。本来シビとはマグロのことですが、沖ことばで死人のこともシビといたのでしょうか。実は漁師にとつて流佛は豊漁を授けて

くれるエビスだったのです。そのまま見捨てて流すと不漁になったり、漕いで（網で結んで海上を曳いて）帰ると祟るといわれます。

漁師は漁に行く途中でシビ見つけた時は、「帰りに拾つてやるから待つている」、と声をかけて菰などをかぶせてやり、帰りに拾つて船に乗せて帰つたといひます。シビを拾うと「マシがいい」とされます。手厚く世話をすると必ず大漁があるといわれました。

流佛を船に引き上げるときには、船頭が一人の時は自問自答で、二人の時は掛け合いで片方が「エベッサン、エベッサン、大漁させてくれるか、くれないか」と問いかけて、相方が「大漁させます、大漁させます」と答えてから船に上げる習俗が全国的にあるそうです。向浜でもおそらく同じような問答をしていたと思います。

向浜ではシビを引き上げる時の作法は、船大工が「ゴシン（船霊様）」を納めるときと同じように、必ずアンマイ（左舷）から引き上げて、オモカジ側（右舷）から下ろしたそうです。流佛はクジラやイルカのように海が見える場所に葬つて石祠や墓石を建てたようですが、向浜では見あたりません。近代は無縁佛として無縁墓地に葬るようになったそうです。

昔、五島の奈良尾島でエビスに祀られた水死人が、故郷の知人の枕神に立つて、「自分は今エビス様に祀られて忙しくてたまらぬ。早く引き取りに来てくれ」と頼んだので受け取りに行くと、もうエビス様に祀っているので渡すことは出来ぬといつて、死骸の引き渡しを承知しなかった（分類漁村語彙）。という話があります。

子供の時、向浜漁港の「スベリ」に菰をかぶせて横たえた土左衛門をよく見に行きました。漁船が沖から搭つて帰ったエビスです。お陰で子供の頃から水死体は見慣れていました。

※ 漕いで帰る船に上げずに海上を曳いて帰ること。

※ スベリ 漁船から荷物を揚げ易いように水際まで斜面になっているところ。

二 船霊さまのこと

船霊様は「続日本紀」にも見られるように古くから船乗りや漁師の海上安全をもたらす神でした。水産大学の練習船海鷹丸やタンカーにも祀っているそうです。

船霊さまのご神体

船霊様は船大工が新造船の船下ろしの時に、「ゴシン（ゴ

シウ）を入れる」といって船霊を祀り込めます。場所は船の中央の帆柱を立てる穴のある「フナバリ（船梁）（張り）」の、**船（船尾）** 向きの側面に穴を穿つて納めました。

ご神体の品物は全国ほぼ同じですが、向浜の場合は、

・ 両親の揃った処女が白い紙で折った男女一對の人形。

・ 柳で作った長方形の木片の真ん中に切れ目を入れ、二

個並んだ形のサイコロを作ります。それに「天一地六表三

合せ**船四合せ**」などといつて、一を上におむけ六を下にし、表

（**船先**）に三の目、**船**に四の目が向くように目を書くのが普通

とされるようです。サイコロは船大工の棟梁が作りました。

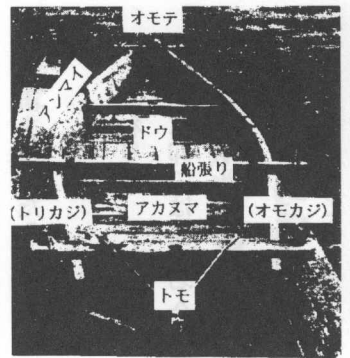
・ 平年は十二文、閏年には十三文の寛永通宝。

この三種類のご神体は、瀬戸内地方とほぼ同じです。地方によつては女性の毛髪や五穀をご神体に加える所があります。

今ではこの品物にどんな意味があるのかわかりません。いろんな説がありますが、定説はありません。いずれにしてもこれらの品物は、船霊という**精霊の依代**だろうと思います。

前にも触れましたが、棟梁が「ゴシン」を入れるときは、トリカジの側（船先に向かつて左側）から船に乗り、ゴシン

を納めたら反対側のオモカジ側から降りたそうです。和船は左舷が上で右舷が下の関係にあるようです。



向浜ではトリカジ側の左舷を特にアンマイと呼びます。網船で若い網子がアンマイから小便をすると海に投げ込まれたそうです

船霊さまがシゲル・イサム

船霊さまは沖で気象の急変を知らせます。船霊さまが海上安全の守護神たる所以ゆえんでしょう。

船霊さまがシゲルこと、気象の悪化を予兆することは、永正二年に出版された『航行要術』に「：船中汚よごアル時船玉鳴り給フ事アリ：」。また、『和漢船用集』に「：舵師船子の語に舟玉すすみたまふと云うことあり、其音琳々りんれんとして宝玉を打つがごとし。：また暴風雨の難を知るといへり。これ神霊のなす処又ははかるべからざるものなり：」。他に「牛が吠えるよう」と書いた本もあります。

船霊さまが予兆を知らせる手段として、シゲル、イサム、ソシル、サヘズルといわれます。これらの言葉の意味は同じ内容を含んでいますが、言葉は地方によって異なるし、漁村や船ごとでも異なるそうです。「その音は鈴虫ねの鳴くがごとく、雀がチュンチュン鳴くがごとく、時には山で虫の鳴く音のよう」ともいわれます。向浜ではチンチン、とかリンリンとシゲルのを聞いたという年寄りの漁師さんが何人もおられました。ただ、「シゲリ」が何の予兆かを判断察知できる漁師は多年の体験によるものとされたようです。

船霊様のシゲリは陸上にいる船頭の袂の中から聞こえることもあり、これは船の異変を告げるものであったと、いう所もあるそうです。

船霊さまのお嫌なこと

船霊さまは全国的に女性の神といわれています。女神という理由は二つあるといわれています。その一つは、白と同じように船そのものに性を附会ふかいするとすれば女性であるということです。もう一つは、もともと船霊さまに仕えていたのが巫女みこであったから、船霊さまを巫女自身の姿と混同した結果女性と信じられるようになったとされる、ともいわれます。

女性が一人で船に乗るとマンが悪くなるというのも、女の船霊さまが生身の女性に嫉妬するからなどといわれます。

船主が、船から女性がおりて行く夢を見ると、自分の船か

ら船霊さまが去つて行つたお告げで、それは船が難破する予兆として恐れられてきたそうです。

先に述べたように沖で拾つた流佛を船に引き上げた時は、船梁ふなはしらより艫とこ寄りのアカヌマでなく、必ず艫先寄りのドウ（オモテ側）に積んだそうです。船梁にトモを向いて納められている船霊さまが嫌うからだそうです。

船はトモ（船尾）を岸に向けて結むすうのも、ゴシン（船霊）がトモを向いているからだそうです。

向浜で船霊さまがお嫌いになる言葉は「サル」だそうです。船上では「タカザキヤマ」と隠語いんごを使つたようです。女神が猿を嫌う俗信は広い範囲にわたつてあるようですが、船霊さまが女性だから「猿」を嫌うことと、「サル」は魚が「去る」に通じるからともいいます。口笛をお嫌いになるといふので、沖で口笛を吹いたら冬でも海に投げ込まれたといひます。

三 おわりに

漁民の信仰には住吉や金比羅がありますが、船霊やエビス信仰は漁民の日常生活や漁労生産に密着した信仰でした。かつての漁村のような沿岸や沖合中心の漁業は様変わりして衰退たいの一途を辿つています。かつて命と生産や安心と期待を「偶

然」に支配された漁民の生活を支えてきたエビスや船霊は、魚群探知機や気象レーダーに取つて代わられました。自然を恐れ自然を頼りにしてきた経験や伝統、信仰や感動は消え去ろうとしています。漁労慣習はもはや過去形で記録せねばならなくなつてしまいました。

若いときに調査を始めたが、忙しさにかまけているうちに古老が次々と他界して、予備調査の段階で終わつてしまった私の責任の重さをつくづく悔やんでいます。

かつて伝馬船がひしめいていた漁港には、プレジャーボート、ヨットやレジャーボートがところ狭しと碇泊して、漁港の様相が一変しました。

参考文献

- 「向浜の漁労民俗について」拙著レポート
- 日本民俗文化大系「山民と海人」「日本民俗事典」
- 「日本民俗資料事典」民俗民芸双書「海の民俗学 牧田茂」
- 「漁労の伝統 桜田勝徳」